

ロシアのウクライナ侵攻、そして約80年前の第2次世界大戦。二つの戦争に翻弄された降参英捷さん(78)が、ウクライナの戦火を逃れ、帰国した。日本統治下の南樺太(現ロシア・サハリン)で終戦を迎え、ソ連の占領後は帰国できず、20代のころからウクライナで生活してきた。ロシア侵攻後、孫やひ孫らとともにポーランドに避難し、11年ぶりに故国の土を踏んだ。降参さんは9人きょうだいの次男で、存命する5人のうち降参さんを除く4人は1999、2009年、サハリンやウクライナから永住帰国し、いずれも北海道内で暮らす。

20日午後1時過ぎ、旭川空港

## ウクライナ在住78歳 北海道に

# 戦火逃れ 故国・日本へ



に到着した降参さんは、出迎えた妹2人と熱い抱擁を交わした。19日に成田空港で出迎えた兄と妹を合わせてきょうだいが久しぶりに顔を合わせた。降参さんは「再会できてうれしい」とロシア語で話した。

日本サハリン協会によると、ウクライナ出身のポーランド人の妻と一人息子に先立たれた降参さんが暮らしていたのは首都キエフの西約130キロにあるジトミル。自宅近くもロシアの攻撃を受け、5日、孫の妻らと車でポーランドへ向かった。国境付近では避難する人々の車で

大渋滞に巻き込まれ、ポーランドにたどり着いたのは8日だった。

降参さんの父親は樺太南部・中知床岬の灯台守だった。1945年の敗戦後、樺太はソ連に占領された。日本人の帰国が進むなか、一家は母親の出産や兄のけがなどが重なり帰国できず、54年にソ連国籍を取得。降参さんは71年にウクライナに移住し、機械製作の仕事をしてきた。

降参さんは「ウクライナに戻るか、永住帰国するか、これからきょうだいと相談したい」。孫はウクライナに残る。「町を守るためだが、心配だ」と心境を明かした。(本田大次郎)

2人の妹と抱き合って再会を喜ぶ降参英捷さん(北海道・旭川空港)